

愛知で触れた美術品

はじめに

みなさんは、美術館に行きますか。私は幼い頃、よく両親に連れられて様々な美術館に足を運んでいました。が、大学生となった今、全く美術館に赴くことはなくなっていました。思えば、美術好きな両親や祖母のおかげで、幼い頃は祖母の真似をして写生をしたり、水彩画に挑戦したりしていました。また、家の中の何枚もの油絵や女の人の裸体像、日曜日には必ず見ている美術に関するテレビ番組などと様々な形で美術に触れる機会が多かったのですが、あまり意識せずここまで歩んできてしまいました。そのため今回、「あいちトリエンナーレ」に赴く機会をいただいたので、久しぶりに幼い頃の美術館巡りの記憶が蘇り、懐かしい気持ちになりました。幼かった私では、きっと感じられなかった作品を見た感覚や感想の違いを大切に作品を見学してきました。

「あいちトリエンナーレ」とは

「あいちトリエンナーレ」とは、三年に一度愛知県で開催する現代アートの祭典です。美術のほかにも映像、音楽、パフォーマンス、オペラなど、現代で行われている芸術活動をできるかぎり「複合的」に扱おうとする国際芸術祭です。

同時代に生きる人間が創造行為を通して自由にアイデアを交換し、その方法や考え方を知り、感動を共有するという、開かれた祝祭の場であり、これはとても素晴らしいことです。

「芸術とは未知への旅である。人間の営みそのものが未知への旅である。そして、芸術祭のかたちもひとつの旅だ。それはたくさんの人が集い、あらゆるボーダーを越え、来るべき響きと私たちを求める探求のキャラヴァンである。」2016年今回のテーマは、「虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」であり、展示会、舞台芸術をはじめ、様々な好奇心をもった人が集う多彩なイベント

が行われる場所を「キャラヴァンサライ」としたそうです。

「旅の疲れを癒しつつも、次なる旅への英気を養う家（サライ）となる。今、無限の想像力を結集して創造の旅（キャラヴァン）が発発する。」



（今回の「あいちトリエンナーレ」の表紙となった作品。二十一年間にわたって落書きとして想像上の都市の地図を描いたパネルを集合したもの）

外国語学部 中国語学科 3年 藤田 早紀

印象に残った作品

「あいちトリエンナーレ」の会場は、名古屋市、岡崎市に豊橋市が加わり、名古屋市美術館や愛知芸術文化センターのほかに市内のまちなかの様々な会場で行われていました。会場を探しながら歩くのはとても楽しく、おそらく私と同じように美術館巡りをしているような人たちもたまに見かけ、スタンプラリーのように次々と美術館を巡るのは新鮮でした。

その中で私が印象に残った作品をいくつか紹介したいと思います。

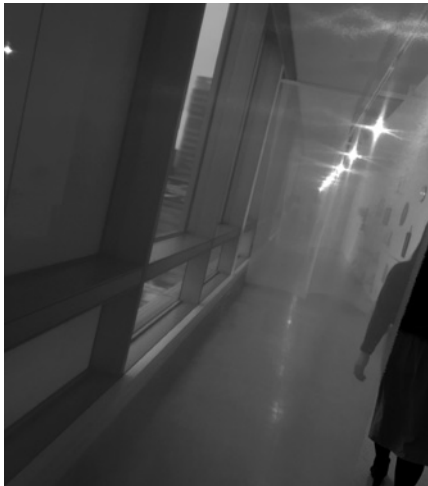
日常の物しかそこにはないのに私が深く共感した作品がありました。映像・モノ・言葉が物語の挿絵のようにして部屋に配置されており、一つ一つに作者の言葉が添えられていました。ユーモアがありつつもどこか悲しみや寂しさが存在していてすごく考えさせられました。作者の手にかかると、その時私もしていた市内の地図も共感せざるを得ない一つの作品となっていて、今の私の状況まで作品に表されているようなそんな気持ちになりました。幼い頃遊んだ人形、電球、カメラ、本など普段近くにあるものが形を変えてこんなに訴えかけてくるとは思いもよらず、今もその時見て印象に残った作品の言葉は大切にしています。

「六つの余地と交換可能な風景」という題名で六色ガラスの光の変化を利用した作品も印象に残りました。それぞれの色から見える景色は同じはずなのにどこか違っていて、反対側に並べられたたくさん鏡が反射する光はとても綺麗でした。

鏡に映る自分の顔や足、景色はその空間で見るといつもと違って見え、不思議でした。

そのほかにも、私が幼い頃よくやっていた、いろんな色で塗った後、その上を黒のクレヨンで塗りつぶし、尖ったもので引っかいて模様を描いたものや、人の感情を表す日本語や英語がただ壁に並ぶものなど予想もしなかったものが作品になっていて面白かったです。

現代アートということで日々の暮らしで無意識に目にはしているものを使って作品にしているものが多く、それぞれが日常の感情を見方を変えて表現していました。作品一つ一つが表している感情と自分自身の気持ちを合わせて見るのが楽しくて、自分の感情が研ぎすまされていくようでした。このような体験ができる美術館はやはり刺激的で自分自身と向き合ったり、新たな感性を得るにはとても大切だと感じました。



(作品名：六つの余地と交換可能な風景)